第五期　青年塾リーダーセミナー　清里講座

ゲスト講話　萌木の村船木上次社長

夢甲斐塾 15 期生共同リーダー　酒井大介

判断基準とインプット

30 年前、清里は第二の軽井沢と言われて乱開発され、駅前は坪 500 万円まで高騰したが、その後転がり落ちるように衰退して土地の値段は 100 分の 1 になった。昔の貧しかった頃は力を合わせてやってきた清里の人々は、土地の値段が上下する中で土地を切り売りしていって、みんな散り散りになってしまった。

人間は毎日生きている中で、小さなことまで数えれば 1 日 2 万回の判断をしている。その判断基準は、主に「出会った人」「出会った場所」「出会った時代」の 3 つによって作られる。乱開発が始まったころ、私は仲間と観光を学びにドイツなど欧州へ行った。その際、私はミュンヘンのガラクタ市で売られていたオルゴールの音色を聞いて「これを集めたら清里の財産になる！」と感じ、仲間の反対を押し切って清里にオルゴール博物館を作った。私だけがオルゴールの音色に反応したのは、幸福にも子供の頃に一番元気なころのポール・ラッシュ先生と触れ合い、米国の映画や音楽に触れる機会に恵まれていたため。人は過去にインプットしたものにしか反応できない。

京都の人は学歴が無くても品がある。金沢・小布施・湯布院辺りの人もそうだ。中国人の高学歴の集団と同行したことがある。皆億単位の収入のある人達だったが、やることは爆買い…普通の中国人と変わらない。地域の、環境の力というものがある。人の品格を決めるのは、育った地域の風。風の質が風格になる。風格を育てる風が清里には無いと感じている。だから、より質のよいものをインプットできる環境を整えたい。

萌木の村の庭造り

次々に色々な専門家にアドバイスを受けながら何度も庭造りを繰り返したが、いつも中途半端になってうまくいかず、悩んでいたところでイギリスの造園家、ポール・スミザー氏が現れた。フィールドバレエをやる広場は、毎年芝生がダメになって張り替えていたが、本当に自然の庭にしたい場所でイベントをしてはいけないというスミザー氏の意見を取り入れ、芝生はやめて、砂利を敷き詰め、その上にチップを敷くことにした。スミザー氏はこれまでの「土作り」を基礎にした庭造りとは考え方がまるで異なっており、最初はとても信じられず、周囲もこぞって反対したが、藁にもすがる思いで彼と庭造りを始めた。

スミザー氏は日本が世界一美しかったのは江戸から明治時代と言った。江戸も田舎もすべてナチュラルガーデンだった。今のイギリスのイングリッシュガーデンは、日本のナチュラルガーデンを真似て作られた。それから百年して、素晴らしいイングリッシュガーデンを見た日本人が、今度はイングリッシュガーデンを真似た。イギリス人は日本のナチュラルガーデンの「あり方」を持ち帰ってイングリッシュガーデンを作り上げたが、日本人はイギリスの庭にある「花や植物」を持ち帰った。生き物の生きようとする力は凄い。苦しい環境でもなんとか生きようとするから、人が肥料や農薬などで手を掛けてやれば、頑張って生き続ける。しかし、手をかけ続けなければすぐに枯れてしまうし、手をかけても元気には育たない。花や植物はそれぞれの地域に合うものがある。

スミザー氏の庭造りは、八ヶ岳から種を拾ってくることから始まり、種からポットで苗を育て、それを庭に植える。最初の 1～2 年は小さな苗なので、周りから雑草が侵入してきてボウボウになってしまう。それを見てやはり彼の指導はダメだという人が多かったが、苗が大きくなるにつれて雑草が減り、7 年も経つと雑草を侵入させないようになって来た。植物はどこに植えられると良いか、どん

な植物と一緒の植えられると良いか、彼はよく知っていた。今 440 種の山野草が萌木の村にあるが、そのうちの 400 種は八ヶ岳のもので、残りはこの土地に合うもの外から一部持ってきた。これまで私たちが苦労して集めて通路や階段に使っていた枕木を、彼は微生物が嫌うからダメだと全部撤去してしまい、地元で捨てられている石を集めてきて野面積みの段々畑のように作り直した。微生物が元気になってくると、蝶がいっぱいやってきた。渡り蝶という、季節に合わせて南北に移動する蝶にとって、この萌木の村はいい休憩地になっていると、蝶の専門家たちに感謝された。清里の周りはすべて田舎で、自然に満ちているように見えるが、周りの農地は農薬漬けで、蝶にとっては地獄。野辺山も今はクマザサだらけで蝶の休憩地には向かない。自然の山野草が繁茂する萌木の村は蝶たちのオアシスだそうだ。信州大学でハーブや香りの研究をしている教授が、本当に自然な植物は萌木の村にしかないと言っている。7 年目でやっとそういう庭ができてきた。私は今、子供の頃に見た原風景を再現しようとしているのではないかと思う。

一番良いものこそ地元で

山梨には良い水がある。山梨に世界一のウイスキー工場、サントリーの白州工場がある。山梨はワインも日本一。うちのビールも 3 年連続日本一。技術と知識があれば、ある程度のものができるが、一番になるためには良い水が必要。山梨にはここにしかない水がある。白州の水は花崗岩の影響で不純物が全く無い。スコットランドとも余市とも全く違う水がある。草津や別府の温泉はすべて同じ泉質。山梨県の地盤は 4 つのプレートが重なっている関係で、地域によって泉質が全く違う。それぞれの水の品質の違いに合ったものを生み出せば、凄いものができる。

山梨県の白州では 1,000 円から 70 万円までのウイスキーを作っているが、山梨にはせいぜい 3 万円ぐらいまでのウイスキーしか売っておらず、良いものはすべて東京へ行ってしまう。ウイスキーは売値の 2 割が儲けになるという。1000 円の酒を売っても 200 円しか儲からない。3 万円でも 6000 円だ。70 万円だと 14 万円の儲け。東京の連中が儲かるわけだ。ルイ・ヴィトンは原価 5%。小金持ちが世界中で買っているが、大金持ちはルイ・ヴィトン本店で買う。本店は高く売れる。スコットランドの蒸留所は一番良い酒は自分のところに残しておいて売っている。だから良いスコッチはスコットランドへ行かないと買えない。なぜ山梨で作った中で一番良いものを自分のところで売らないのか。山梨の人は地元の良さを、価値を知らない。だから外に持って行って売ろうということになって、地元で作った良いものがすべて東京へ流出してしまう。

価値の創造

価値は自分で作るもの。それだけ、今だけ、その場所だけ、というものを作らなければいけない。ワインは大体 1 kgの葡萄から 1 本のワインができる。高級ワインは何kgもワインを使うわけではない。それが何百円から百万円の違いが出る。価値はモノづくりをしている人が決めていない。価値のルールを作る人たちがいて、その人達が儲けている。田舎は価値のルールを作る東京にすべて良いものを吸い取られている。5 千円と 5 万円の酒の差は小さい。0〜99 までは商品にならない。100 になって初めて 1 本 1000 円で売れる酒になる。ところが、101 点だと 2000 円になり、102 点だと 4000 円になる。たった 1 点違うだけで、価値が 2 倍に膨れあがる。すると、110 点で百万円になる。千円と百万円の酒の差は、僅か 10 点でしかない。人間も同じ。ほんの小さな差がとても大きくなる。ゴルフでも賞金総額 5 億円の半分以上は 1 位と 2 位で持っていく。バレリーナでも世界最高峰の人は、日本一のバレリーナの 10 倍以上のギャラを取る。たった 1 点の差で、大きな評価の差になる。その差は 100 人に 1 人にしか判らないが、僅か数点で評価は 10 倍以上の差になるから、1 点に拘れるかどうかが鍵になる。京都の人はこれを知っている。山梨の人はこれを知らない。

まちづくりとリーダー

山梨のまちづくりを話し合うなら、まず山梨の一番良いものを知らなくてはならない。誰が一番の宝石を作っているのか、どこが一番うまいワインやウイスキーを作っているのか。桃は、葡萄は、宝石は…。山梨のリーダーたちが山梨の良さを知らなくては始まらない。私も昔は 3 万円や 5 万円もす

るウイスキーはビビって買えなかった。でも、世界には１億円するウイスキーがあると知ったら、100万円ぐらい安いものだと思うようになった。何事も一番上を知らずして、リーダーは務まらない。

まちづくりをするには、地元の一番いいものを知ってから物語を考える必要がある。だいたい、まちづくりは現状を基準にして下から積み上げたくなってしまう。その方が楽だし、簡単に手を付けられる。しかし、そんなまちづくりは成功しない。まちづくりを成功させるには、最高の物を題材にした物語を考えて、描いた絵に向かって組み立てていく必要がある。

ポール先生は人を能力の差で比較はするが、絶対に差別しない。そんなポール先生の下で育ったお陰で、私は物おじしないようになり、五感で感じるままに行動できるようになった。頭の良い人は理論武装してから行動する人が多いが、私はその反対。だから音楽のことも分からないのに、平気で高価なオルゴールを売ってくれ！と物おじせずに言えちゃう。実はポール先生もそうだった。ただ最近、感性だけでは従業員にきちんと伝えられないことに気が付いた。理論武装をできる人と組んで、これからはやっていきたい。